

## 論文化

- 研究成果の論文化は必須事項です。論文化の全責任は研究代表者（PI）が担います。Negative results の場合であっても出版バイアスを排除するため論文化しなくてはなりません（論文化しない行為は研究参加者に対する倫理違反に該当する）。
- 論文化は可能な限り早期に行いましょう。解析結果が判明してから概ね6ヶ月以内を目標とすべきです（論文化が遅滞した場合にはPIの変更も考慮されます）。研究計画書をあらかじめ英文化しておくことをお勧めします。これを基に、結果と考察を加えて最初の論文案を共著者の意見を聞くことが可能になります。
- 投稿雑誌をどこにするか、研究立案の際に検討しておきましょう。Target Journal を決めることはモチベーションも上がりますし、研究の自己評価にもなります。
- 結果が得られたら Target Journal を決めましょう。自分で考えるより一段階高い雑誌に投稿して見て下さい。例え reject されても reviewer の意見が、次に投稿する雑誌の参考になります。
- 雑誌を決めたら投稿規定 instructions to authors を入手して、その雑誌の投稿規定に沿って論文化を進めて下さい。
- RCT の場合は CONSORT 声明のチェックリスト、CONSORT フローチャートが必要になります。試験を立案する場合や、第2相試験の場合にも CONSORT 声明のチェックリスト、CONSORT フローチャートで確認することをお勧めします。
- 共著者の決定、論文投稿の実際、論文の採否、再投稿などについては別の項で説明します。